

～生活 研究実践～

自然と繰り返し関わり、遊びを工夫することによって 季節の移り変わりや友達と関わって遊ぶ楽しさに気付く学習

～1年「なつと ともだちに なろう」の実践を通して～

林 裕 輔

I はじめに

生活科では、具体的な活動や体験を通して、自立の基礎を養うことを目標としてきた。自分自身や自分の生活について考えることや、その過程において、生活上必要な習慣や技能を身に付けていくことが自立の基礎を養うことにつながっていく。これまでの生活科では、身近な人々、社会及び自然等と直接関わることや気付いたこと、楽しかったこと等を表現する活動を大切にする学習活動が行われており、言葉と体験を重視した改訂の趣旨が概ね反映されていると、その成果が評価されている。しかし、次期学習指導要領では、活動や体験を行うことで低学年らしい思考や認識を確実に育成し、次の活動へとつなげる学習活動を重視することが求められている。



生活研究実践
一年『なつと ともだちに なろう』の実践を通して

本校においては、活動や体験に対して意欲的に取り組む児童は多いが、友達と交流したり、学習を振り返ったりする力が十分には育っておらず、自分の思いや願いを実現できずに活動が終わってしまったり、他者と関わり合って考えたりできない児童の姿が見られる。

そこで、本研究では、学習活動を「教師と児童による1つのストーリー」として捉え、思いや願いが実現する1つのストーリーを教師と児童が作っていく中で、期待する資質・能力の育成を目指してきた。また、具体的な活動や体験から感じたこと、考えたことを表現し、次の学習に向かう力となるという好ましいサイクルを築くことを大切にしてきた。

本実践では、春から夏にかけての季節の移り変わりに児童が気付いてきたところから単元を始め、春にも活動したプレーグラウンドや附小の森での夏探しから「遊んで夏と友達になりたい」という学習課題を児童が設定した。水や草花、砂や泥などの自然を利用したり、シャボン玉やペットボトル、空き容器、スコップなど身近な物を使ったりして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使うものを試行錯誤しながら工夫して作り、遊び自体の面白さや、友達と関わって遊ぶ楽しさに気付くことを目指した。

事前調査の結果、「外で遊ぶことが好き」は、88.9%、「友達と遊ぶことが好き」は、94.4%で、自然や友達と関わって遊ぶことが好きな児童が多いことが分かった。また、泥遊び、水遊び、砂遊びなど自然を生かした遊びをしたことがある児童が多く、また、学校でも同じような遊びをしたいと考えている児童も多いことが分かった。実態を踏まえ、遊びを自分で考え、工夫していく活動を通しての気づきを交流し、遊びの面白さや友達のよさに気付くことを目指した。

II 研究の目的と方法

本研究では、児童の思いや願いを生かした体験や活動を通して、感じたことや考えたことを表現し、次の学習に向かう力となるという好ましいサイクルを築くための効果的な手立てを明らかにした。そのために以下の3つの視点から授業や児童の様子について分析する。

- 児童の思いや願いを生かした体験活動の充実
- 気づきの質を高める表現活動の充実
- 学びのよさを実感する振り返りの充実

Ⅲ 結果と考察

1 児童の思いや願いを生かした体験活動の充実

(1) 結果

本単元では、児童がしたい遊びを「水遊び」「泥遊び」「砂遊び」「草花遊び」「シャボン玉遊び」のように大別した。どの遊びも、児童が経験したことのあるものばかりであった。そのため、遊び自体をイメージしやすく、単元の始めから児童は遊びに対しての思いや願いを言葉で表現することもできていた。しかし、遊びの経験に差があり、「スコップを使って大きな川をつくりたい。」など、思いや願いを具体的に遊びや遊びに使う物の工夫につなげることができる児童がいる反面、「砂で遊びたい。」など、漠然としている児童も多くいた。

そのため、試しの活動（遊び）を設定することにした。試しの活動により、児童の思いや願いがより確かなものとなり、また、繰り返し遊びの活動をすることで、児童は自分のしたい遊びについて、試行錯誤しながらも考えを巡らせ、遊びを工夫していくことができた。

また、大別した遊びをもとに、基本的な遊びの場を設定し、関係する道具などをその場所ごとに置いておくことで、同じような遊びをする児童同士での交流が生まれやすくなり、「泥だんご上手だね。」「こっちはもっと水を足したら、泥のおせんべいみたいになったよ。」など、友達の遊びと自分の遊びを比べたり、一緒に試したりすることで、さらに遊びが工夫され、児童は自分の思いや願いを実現することができた。



写真1 泥の感触を伝え合う児童の姿

(2) 考察

生活科において、「伸ばしたい思考力・判断力・表現力等が発揮される」ことを大切に、具体的な活動や体験を行っていくことの重要性は言うまでもない。本単元でも、それぞれの遊びや児童について伸ばしたい思考力・判断力・表現力等を具体的な児童の姿で設定してきたが、その期待する児童の姿が発達の段階や児童の実態に合っていたのかは、今一度考える必要がある。「活動あって学びなし」とならないよう、単元を通してどのような姿を目指していくのかをさらに明確にすることが大切である。

本実践では、プレーグラウンド、附小の森の活動の両方に「試しの活動（遊び）」を位置付け、「実感」することで、児童は、次にどのような遊びをしたいのか具体的に考えることができた。また、「先生お願い」というカードを活動の後に書くことで、次の活動を見通し、したい遊びや必要な道具を考えられるようになった。遊びを繰り返すことで、必要なものも自分で用意してくるなど、自分の生活圏で準備できるものを使うという考えに至る児童も見受けられた。

2 気付きの質を高める表現活動の充実

(1) 結果

本実践では、気付きの質を高めるために、同じような遊びをする児童同士が近くで活動することで交流を生みやすくするという場の工夫と、「気付きのミニカード」として気付きを蓄積し、そのカードを基に交流し、表現活動の充実を図った。

同じような遊びを近くですることによって、児童は、「自分の気付きや思いついた遊びを友達にも教えたい。」という気持ちになり、自然と気付きの交流が生まれる機会が増えた。また、交流の工夫として、視点を「発見の共有」「新たな気付き」「関係性の気付き」の3点に大別し、「緑色の草が増えた」「花の種類も変わった気がする。」など発見の共有に留まる児童については、教師が交



写真2 試したことを伝える児童の姿

IV まとめ

本研究では、児童の思いや願いを生かし、よりよい生活を創り出すことのできる資質・能力の育成を目指してきた。1年次研究の成果としては、児童の思いや願いを生かすことで、実感を伴った活動や体験となり、多くのことを感じ、考え、表現することにつながった。また、それが新たな活動に向かう力につながるという、好ましいサイクルを生み出すことが分かった。また、このサイクルの中で、児童が資質・能力が発揮される場面を具体的に設定することで資質・能力が育成されていくことが分かった。

遊びの中で、気付きを交流することにより、対象化され、比較・分類・関連付けされるなどの気付きの質の高まりが、自分自身や自分自身の生活について考えることにつながることができた。以下に、学習を通しての児童の振り返りを紹介する。

- ・草花遊びでは、お花でヨーグルトを進化させて、すごく楽しかった。
- ・最高だった遊びは「変なものづくり」です。よもぎのはっぱで変なものが作れました。よもぎを持って帰って、よもぎもちを作ってみんなに食べさせたいな。
- ・みんなで力を合わせて水かけあっこをしたのが楽しかったです。
- ・先生もどろだらけになっていて楽しかったです。また行きたいです。

上記の記述からも、本実践を通して、自分たちの生活と密接に関係する自然との関わりを考えられるようになるとともに、活動自体の面白さを感じ取り、次の活動への意欲が高まったり、態度が養われていたりすることが分かる。以下に、研究の成果と課題を挙げる。

1 成果

- 思いや願いを生かした学習過程を大切にし、児童に寄り添った形で体験活動や表現活動を位置付けていくことで、活動に必然性が生まれ、主体的に学習に取り組むことにつながった。
- 交流しやすい環境構成により、自然の不思議さや友達や遊び自体の面白さに触れたり、遊びを工夫する面白さに気付いたりすることができた。
- 気付きのミニカードを蓄積することで、単元での気付きを1つのお話としてまとめることができ、自分自身の成長を感じられることができた。

2 課題

- 振り返りの再定義を行う必要がある。思考活動としての、振り返りとなるよう単元のどのタイミングで、どのように行うかを考えていく必要がある。
- 生活科におけるICT機器の効果的な活用方法などを吟味し、すごく短い時間に生まれる気付きを交流に生かし、気付きの質が高まっていくようにしていく必要がある。

V 主な参考文献

- 小学校学習指導要領解説 生活編 文部科学省 日本文教出版株式会社 平成20年8月
- 小学校学習指導要領解説 生活編 文部科学省 平成29年3月
- 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について」 平成28年12月
- 初等教育資料No.951 「生活科における改訂の具体的な方向性」
文部科学省 東洋館出版社 平成29年3月号
- 初等教育資料No.954 「学習指導要領改訂のポイント生活科」
文部科学省 東洋館出版社 平成29年6月号

生活部会

司会者 竹中 一三（旭川市立永山西小学校教諭）
助言者 高橋 一寛（旭川市立向陵小学校校長）

I 授業の部会から ※主なものを抜粋

写真や動画を活用した導入について

<授業者から>

授業者として、前時の試しの活動の時に遊びを思うようにできず困っていた児童がいた。1年生段階では、活動した時の気付きなどはすごく短い時間に生まれるものであり、前時の価値ある気付きが本時につながらないこともある。活動にすぐ入れない児童や、前時の活動をつなげるために、動画や写真を利用した。活動が始まったときに、すぐに自分のしたい遊びをすべての児童が始められたので導入の価値はあったが、効果的であったか。児童の言葉を拾いながら、丁寧に前時の振り返りをしたが適切であったか。



<参観者から>

- 映像や写真での振り返りはよかったが、何のために前時を振り返らせるのか明確な目的意識が必要である。
- 写真、動画での導入、前時の振り返りは効果的であった。
- 児童の興味・関心が持続していたので、そこまで丁寧にする必要はなかったのではないか。

遊びの中での気付きの交流について

<参観者から>

- 体験を児童がどのように語れるかが大切である。
- いつでも「見付ける」「比べる」「たとえる」が語れるような学級経営を行っていく。
- 児童一人一人の小さな気付きを次時にどのようにつなげるか。
- 子供たち同士、話しながら活動していた。
- 子供が語りやすいタイミングでの声掛けを心掛ける。

授業の感想・その他

- ・環境構成について、それぞれの場をもう少し近付けた方が、違う遊び同士でも交流が生まれ、遊びが広がったのではないか。
- ・前時の続きの遊びについて、すごく楽しそうに遊んでいた。
- ・ダイナミックでとてもよかった。
- ・幼稚園での「体験」と小学校生活科での「学習」の違いはどこにあるのか。交流と振り返りにあ
- る。
- ・単語ではなく自分の活動を意味付け文脈で語れていてよい。
- ・1年生でペアでの語り合いを入れていたのがよい。対話につながっていく。継続して育つとよい。

- ・体験から表現。「体験の言語化」が大切にされていてよい。
- ・気付きの質を高めることは、「やってみたこと」を次につなげていくことが大切だと思います。

II 助言者からの講評

(1) 高橋 一寛先生から

外での遊びの活動をするということ、雨が降っても外が寒くてもするという事で心配していた。朝から気温も低く、天候に恵まれなかったが、授業の時間には晴れてきて子供たちの活動をする上でのコンディションは整って安心した。

本時は、気付きの質を高めたい授業であったので、授業者の児童との関わりを中心に参観した。草花遊びグループは、こんな遊びもあるのだなと感心した。ずっと袋に草を入れている子供たちに対して、水遊びチームの方へ授業者が連れて行き、草花遊びと水遊びを組み合わせたような遊びを紹介し、草花グループに指導したかったようだが、子供はあまり興味を示さなかった(児童が求めた関わりであったのか)。水遊びグループに対して、どろどろになっても、ずぶ濡れになっても大丈夫だということを授業者自身が、示せばもっと豪快な遊びになったのではないか。しかし、授業者が意図していたように、停滞した水遊びグループが、活動が活発な泥遊びグループに流れ、子供同士の交流により、さらに遊びがよい形で進化していたのはよかったのではないか。シャボン玉グループは、子供たちから「もっと遊びを進化させたい。」「一緒に試したいね。」「モールを巻いてみたら大きなシャボン玉ができたよ。」「教えてもらってできるようになったよ。」「ぼくの発見見て。」など、価値ある気付きが随所に見られていた。それを、もっと受け止める授業者の関わりが必要であった。泥遊びは、「川にしたい。」「海にしたい。」という子供たちが、活動に没頭していた。途中で、「丸くつなげたい。」と言い、拘っていた子が1人いた。1人であったが、だんだん周りもなびいてきた。授業者より終わりを告げられるが、延々とその子はしていた。砂遊びは、女の子2人と男の子2人に分かれていた。女の子たちは、落とし穴を作っていた。男の子たちは、砂でプリンを作っていた。落とし穴がだんだん掘れなくなった、女の子たちは水を入れるようになり、プリン作りに飽きた男の子たちは、何も会話はしていなかったが、女の子たちみたいに落とし穴を作り、水を入れていた。そこに、言葉の交わさない対話があったのではないか。

振り返りのところで、「シャボン玉遊びが、めちゃくちゃ楽しかった。」と言う子がいたように、活動自体は、児童に即したものであった。ただし、気付きの質を高めるための活動としてはずれがあったのではないか。もし、気付きによって、活動が変化し、さらなる気付きを生み、質が高まっていくとしたら、どこでどのようなことを行うべきだったのか。きっと、表現させる場面である。ただし、活動なら活動とすることも大切である。体験と表現の同時進行はやはり難しさがある。子供たち同士が、比べたくなる、対話したくなる条件整備をどのようにするかが授業者の腕の見せ所であり、その活動にもっと裏付けを持たせることが更なる研究の発展につながる。

生活科は、平成30年度から新学習指導要領を全面実施してよいことになっている。教科書はないが、そのような時期を迎えている。幼稚園教育に関しては、大々的な改革があり、来年度から全面実施である。幼稚園教育の中にも、今まで生活科が大切にしてきた、思考力や協同性が打ち出されている。今後、附属小学校の生活科として、どのように幼稚園と連携し、授業を作っていくが大切になっていく。

